

合宿所のような宿での、幅広い年代の人々との語り合いは、何か学生時代の心地を思い起こされ、若い頃にさまざまな葛藤や悩みに苦しんだように、普段はあまり直視しない今の自分の悩みや不満に向き合う良い機会、機縁になったように思う。

個々人の発表は、もっと教学的な方向に行くのかと思っていたが、思いのほか、それぞれの悩みや苦しみをうちあける場となり、それにひきずられるように、自分自身への問いかけとなっていた。

そのひとつに、寺を継いで、僧侶になるということに対する葛藤には考えさせられるものがあった。それほど抵抗もなく、寺を継ぐという選択をした自分にはない悩みであったので、そのことは逆に、寺を継ぎ、僧侶になるということに、自分が真剣に向き合っていないということではないか、と考えさせられたのである。

僧侶として、門徒さんの前で、話す立場上、どうしても教える側というスタンスに陥りがちになる自分にとって、今回の自主伝研は、改めて、真宗の教えとは、自分自身に向き合うことなのだということを再認識させてくれるものとなった。

一人で考え混んでいくと、ついつい迷走し、どこに向かうか分からなくなる自分は、やはり、このような場に出て、人と話し合うことをしなくては、と思い知らされた。